

# 異形 蛇足

monobe0329

男はつまらなそうに湖の上を歩いていた。もうすぐ、日は上り切るだろう。少し顔を上げ、空を見上げる。暑い一日になりそうだ。

湖の向こう、白鷺城を模した百麗の城が見える。近づくにつれ、湖の辺、場違いな赤色のビーチパラソルが一つ、その輪郭をあらわにしだした。

男は吐息を漏らすと、ついつと湖面を後ろへと蹴る。男はまるでアイススケートのように、湖面を滑ると、赤いパラソルの手前、陸地を踏んだ。

赤いパラソルの両脇には、二十歳前後の女性が二人、パラソルの下の人物を大きな扇で扇いでいる。

女性が一人、幅広の日よけを上にあげ、男を認めると意地悪く笑った。

二十代後半から三十代に入った頃の美しい女性だ。ただ、その腰回りには九本の尻尾だろう、ゆらゆらと蠢いている。

「尻尾を通すために、その白いワンピースのお尻、穴を開けているのですか。九本というと随分大きな穴でしょうね」

「最愛の弟子の最初の言葉がそれとは、哀しいねえ」

「白澤さん。いつものおばあさんの姿の方が可愛いですが」

「この姿は、お前の娘と戦って以来だね。全力を出すには本性に戻った方がいいのさ」

白澤は帽子を取ると、隣の女に手渡した。女は扇を下に置くと、両手でおしいただくように白澤の帽子を受け取る。

「なあ、千尋。この二人をなんとかしてくれ」

二人の女性はともに笑みを浮かべていたが、その笑みは狂気を孕んでいる。

「魔物の潜伏調査でもさせたのですか。無理させ過ぎですよ」

仕方ないなと男は小さく呟くと、二人を自分の前に座らせた。

「その身、その心に染み入りし、邪悪の素、この言葉の響きにて浄化せしむ。ゆらり、ゆらゆら。日差し揺れ、ひの心の、緑に包まれん、みの、よの、やわらかき、大きな手、いつむうなな、抱かれし、幼子よ、清浄の手のひらに包まれん」

男が順番に女の頭を撫でた。

崩れて行くように、二人の女が倒れて行き、安心したかのように、男の足元で眠ってしまった。

「次に起きた時はすっきりしていますよ」

男は白澤から少し離れて、あぐらをかいた。

「寿ぎ歌は心が清らかでなければ唄えません、白澤さんも心を入れ替えていただかないとね」

「悪の塊だったお前には言われたくないよ。しかし、あの娘と暮らすようになって、お前も随分変わったな」

「ありがたいことですよ」

男は少し俯き、そう答えた。

「本当にありがたい」

「ところで、お前を呼んだ理由だけだな」

「つまらない用事なら帰りますよ」

「お前はあとどれくらい生きることが出来る」

すいっと男の眼差しが鋭くなる。

「一年。養生し、無理をしなければ二年生きることが出来るかも知れませんね」

「なら、その一年を私にくれ」

「事情によっては」

男が冷静にそう答えた。

白澤はふいっと男に顔を背けた。

「古来、酒吞童子の事件より、人間と鬼の間にて協定が定められた。お互い、一切の干渉をせずだ。もちろん、それぞれの跳ね返りが協定違反をしたこともあったが、それなりに協定はうまく作用していた。しばらく前まではな」

「最近鬼の目撃例が増えましたし、行方不明者もうなぎ登りとか」

男があいづちを打つ。

「新たな協定が結ばれたらしい、それも人間の側にかなり不利な内容だ。この二人が探り出して来てくれた」

白澤は視線を戻すと、二人の娘を見つめた。

「ああ、この子達は精鋭の二人でしたね。いま、思い出しましたよ」

「娘以外は眼中なしか」

白澤が面白そうに笑った。

そして、白澤は白いバンドを取り出した。

「これがわかるか」

男はそれには触らずに眺めたが、少し顔をしかめる。

「ビニールかエナメルの、手首にはめるような白いバンドですね、いつだったか、はやった記憶がありますよ。何かのキャンペーンとかで随分と宣伝されてましたね、詳しくは覚えていませんが。でも、変だな、人の可聴域を越えた音を出していますね」

「これをはめている者は鬼に襲われない、これが新たな協定の内容だ」

「つまり、持っていない人は」

「襲われても、政府は積極的な介入をしない。所詮、ただの警察官に鬼と戦うことなんて出来ない、事情を知らない現場の警察官が発砲しようが、その程度は鬼たちも斟酌しない。まっ、そんなとこだ」

白澤は白いバンドを引きちぎると放り投げた。

「ひとつが三百万円、年に一回の調整に十万円。五年で廃棄、新しく買わなきゃならない」

「なかなか、商売上手なことですね」

男は吐息を漏らすと、白澤を眺めた。

「で、白澤さんを何をどうしようとするのです」

無然とした表情で、振り返る。城の大門が閉ざされたままだった。

「なんか、腹立つ。貧乏人は、金持ちの贅になれってのが」

ふと男は白澤と同じ方向、城の天守閣を眺めた。

「ひよっとして、白澤さん、追い出されましたね。当主の兄に」

「尻の穴の小さい男だ。初代に申し訳ない」

「協定が定められた時点で鬼と戦うというのは、鬼と人の二つを敵に回すことになる。波風立てるな、誰も知らない奴を、生け贄として渡しておけばいいんだからってね」

「今更、善人面するつもりはない。ただ、このままでは、初代に顔向け出来ない」

「白澤さんの中で、本家初代は今も大切な人なんですね」

「今も初代を追って死ねなかったことを悔やんでいる」

白澤は城に背を向けると、静かに目を瞑った。

男は大袈裟に溜息をつくと、ゆっくり立ち上がり、お尻の土を払った。

「私は自分の命を白澤さんに譲ることは出来ません、娘に泣かれてしまいますよ。ただ、娘たちが私の死んだ後も、そんな日々、鬼に食われるんじゃないかなんて不安な日々を送らせることは出来ません」

男は白澤に背を向け湖に向かった。

「白澤さん、もしも現場で会った時はよろしく」

男はゆっくりと湖面を歩きだした。

「お前は初代に似ているよ」

白澤が小さく呟いた。

「千尋、千尋。開けてちょうだい」

朝、男が仕事に出かけた後、幸は台所であさぎと洗い物をしていた。

「あれ、誰か来たのかな」

「無視していい人だから」

幸はむすっとした顔をして、お皿を洗う。

「あ、そうか……。おばあさんだ。あさぎが行ってくるよ」

慌てて、幸はぎゅっとあさぎの裾を握った。

「幸が行くよ。あさぎ姉さんはあとお願い。あんな性悪ばあさん、姉さんになにするかわかったもんじゃないよ」

門扉の前に、品の良い和服を纏った老女の姿で白澤が笑みを浮かべていた。

「あら、幸ちゃん、お久しぶり。ああ、千尋は仕事なのね」

「えー、どちら様でございましょうか。ここに住んでいらっしゃる方達は先日、引越しされました」

「まっ、なんて冷たいこと言うのでしょうか。それより、これ、どうぞ」

門扉の外から、笑みを浮かべ、白澤が丁寧に包装された包みを差し出した。

「これは……」

「引越し蕎麦よ、ほら、斜め向かい、引っ越してきたの」

幸は呆然と白澤を見詰め、そして、その指差す斜め向かいの家を眺めた。

「これからもよろしくね  
にかっ、白澤が愉快に笑った。